

共鳴都市
—変容の中に生き続ける建築—

変容	原風景	輻輳	1240046	恩藤慎太郎
共鳴	川	溜まり	指導教員	高野洋平

0. 変容する都市

都市とは変容するもの。長く住み慣れた故郷の風景も歴史ある建物もいつしか姿を消し、取り壊された後の空地には次々と高層マンションが立ち並ぶ。それにより都市はその特異性を失い均質化へと牽引される。都市開発により都市の記憶たちは次々と姿を消し、以前までそこに何があったのか分からなくなってしまう。したがって、懐かしさは薄れ、違和感とどこにでもある凡庸な景色だけが残る。都市が変容すること自体は必然的であるが、その都市が長く生き続けるためにすべてをリセットするのではなく、その場だからこそ残り続けられるようなものが存在していてほしい。都市の大きな構成要素の一つである建築は、変容する都市の中で不変的存在として生き続けることはできないのであろうか。

1. 目的

本設計では、変容する都市の中で消費的に扱われる建築が生き続けるためには何が必要なのかを考える。その都市の特異性を再解釈し、その場だからこそ生き続けることができる・建築の新たなあり方を提案することを目的とする。

2. 敷地

敷地は兵庫県宝塚市の中心市街地に位置する。市街地の中心を流れる武庫川は観光ダムにより一部堰き止められており、それにより水の溜まりとなった川全体を敷地対象とする。



図 1. 宝塚市中心市街地の航空写真
(Google Earth 上空写真に加筆して掲載)

2.1 歴史

昔から左岸と右岸では行政区画が異なり、それぞれが触発し合いながら別々の物語を歩んできた。そのため宝

塚には、温泉街、歌劇、阪急電車、ベッドタウンなどの様々な要素が混在している。しかし近年の急速な都市開発の波に宝塚の記憶たちも飲み込まれ、この街でも冒頭で述べたような「どこにでもある凡庸な景色」を次第に感じるようになってきた。



図 2. 温泉街、宝塚歌劇、阪急電車の写真
(一部たからづかデジタルミュージアムより掲載)

2.2 現状

歴史ある建物や構造物は都市開発により次々と取り壊され、その跡地には高層マンションが立ち並ぶ。武庫川を挟んで左岸に歌劇街、右岸に高層マンション群が対峙している。現在の宝塚は温泉街としての顔は完全に消失し、歌劇と住宅地の街として知られる。

3. 提案

3.1 原風景の再定義・再構築

宝塚での原風景を読み解き再定義する。左岸と右岸で行政区画が異なることを始めとし、宝塚には様々な対立要素が存在していた。左岸と右岸、文化と人間、都市と自然、居住者と来訪者。かつてはそれらが互いに触発し合いながら発展してきた。しかし今では対立要素同士が排他的になりお互いが関係を持たず排除し合うがゆえに、都市に違和感が生じている。すなわち宝塚の原風景とは、数多くの異質な要素たちが相互作用し響き合う姿ではないのか。そのような響き合う原風景的空間を再構築する。

3.2 都市・建築の多様性と対立性

『多様性と対立性を備えた建築は、断片的な関心の範囲にとどまらずに、常に全体に対する見通しを持ちそれ自身が全体性を有する。排除することで得られる安易な統一よりは、受け入れることで得られる複雑な統一を実現しようとするものである』。建築家ロバート・ヴェンチュリは近代建築の純粋主義を好まず、対立する要素や多様さを含む建築に価値を見出そうと試みた。

このことは、機能や目的がますます多様化し変容する現代の都市においても重要であると考え。機能や目的を限定するものは、ある力を生み出すと同時に限界が存

在し、いつしか消失する。すなわち、現代の都市・建築が生き続けるためには、多様性や対立性を受け入れる寛大な態度が必要ではないのか。

3.3 対立・共存・輻輳

現在の宝塚では都市の諸要素は対立関係にある。他者を受け入れず必要のないものは排除する。それに対して共存と輻輳は同時存在の状態を示す。共存は異質なものの同士が一つの空間の中で適合しようと調和し合うことであり、同時存在はできるがそれぞれの特異性は次第に失われる。輻輳は共存とは異なり、異質なものがそれぞれ単独の境界線を有するため、特異性を保ちつつも響き合う状態が生じると考える。すなわち、輻輳こそが宝塚の原風景の再構築に必要な状態なのではないか。

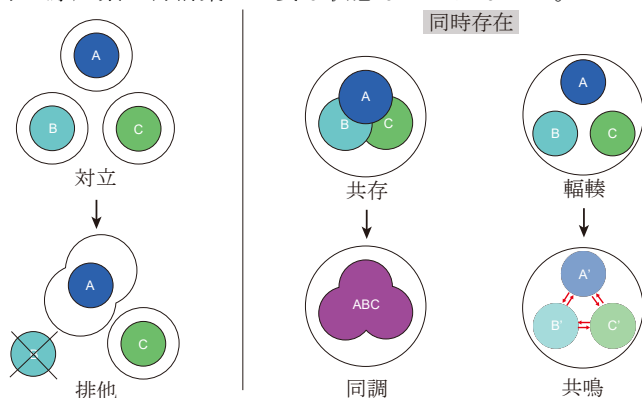


図3. 対立・共存・輻輳

4. 手法

4.1 都市をつなぐ

様々な対立要素により宝塚は分断された状態にある。扇状地により機能ごとに平行にレイヤ分けされた空間は都市に分断を（図.1 より）生じさせる。そこで大きな分断である左岸と右岸を繋ぐように設計する。（図5）

また、左岸と右岸を広くつなぐことで阪急宝塚駅と阪急・JR宝塚駅を繋ぐ最短の遊歩道として機能する。

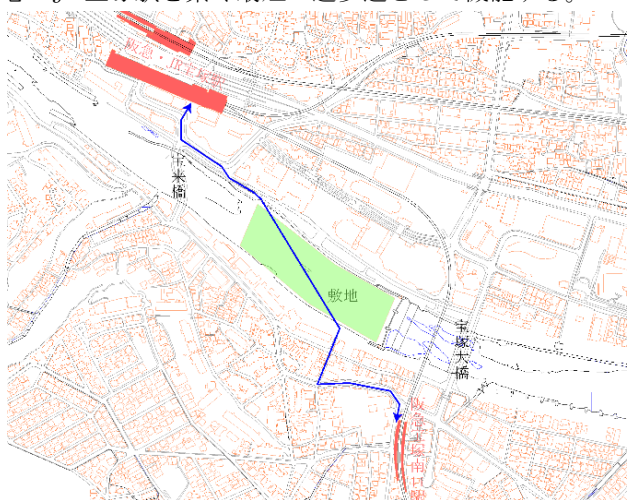


図4. 駅間の最短距離の遊歩道
（国土地理院，基盤地図情報サイトのデータに加筆して掲載）



図5. 分断された現在の宝塚
（Google Earth 上空写真より掲載）



図6. 左岸と右岸を繋ぐ設計の全体像

4.2 川に従う

本設計は橋でもなく、公園でもなく、「川」全体を設計する。川は都市とは裏腹に全ての記憶を受け止め、変容の中で生き続けてきた。都市とは対立関係にあった川を排除するのではなく、残り続ける川に従いそこに新たな場を設ける。川が人・建築を取り巻くように設計する。川にできた場では川の水を利用し、川の水に浸透され、川の水に流され変容し、決して川を上回る強度を持ってはならないこととする。信頼できる「川」に従うことこそが、溜まりが響き合い併存するためのルールとなる。

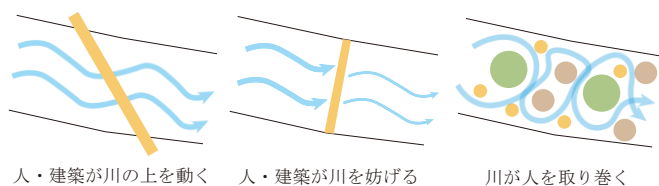


図7. 川と建築の関係ダイアグラム

4.3 溜まりをつくる

水量の少ない武庫川では、川を観光地化するために水を溜める観光ダムが古くから用いられている。川の水を「溜める」ことに宝塚は様々な価値を見出して来た。「溜まり」が存在することで、一つの意味しか持たなかった川に様々な出来事、体験が発生する。「溜まり」を作ることによって多様性を獲得する。



図8. 観光ダム

5. 設計

5.1 構成

輻輳状態ではそれぞれが単独で境界線を持つ。その境界線を「都市の道」と「生態系の道」の2種の道として設計する。「都市の道」はコンクリート、「生態系の道」は蛇籠（ガビオン）によって施工する。対立する2つの道を拮抗させることで囲われた空間は均質的にならず多様性や対立性を受け入れる空間となる。その囲われた空間の事を「溜まり」と呼ぶ。一つとして同じ「溜まり」は存在しない。

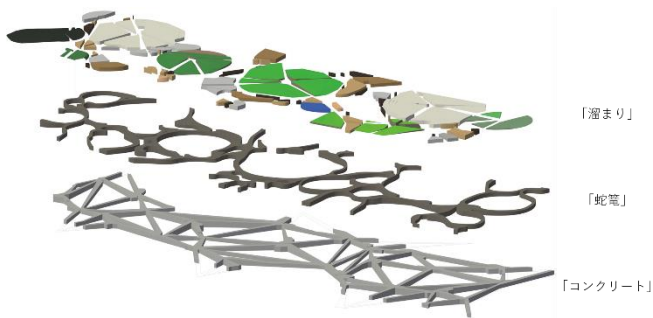


図.9 3つの構成要素

5.2 手順

(1) 場

初めに、川に大まかな場を与える。場は宝塚に因んだ10通りの用途で定義し、それぞれ面積の異なる正円として配置する。場の用途ごとに、構成する素材を変える。（コンクリート、土、砂など）

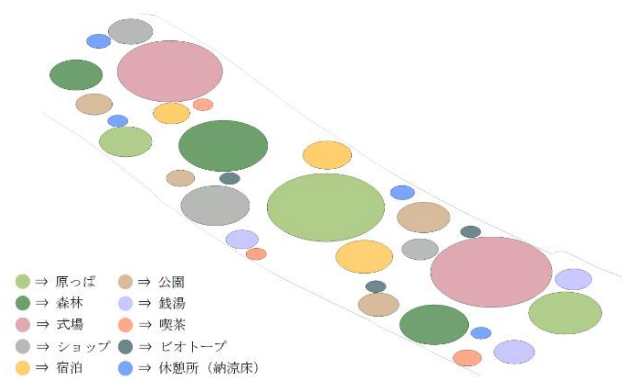


図10. 場の配置

(2) 道

それぞれの場と場、場と両岸を繋げるための道を「都市の道」と「生態系の道」の2種に分けて設計する。これらの道は3.3で述べたようにそれぞれの「溜まり」の境界線となる。

① 都市の道

都市の道はコンクリートで設計する。都市の道とは人間のための道であり、効率的な最短距離のルートとなる。それぞれの場の中心同士を直線で結ぶ。急速に進む都市開発のように、効率や利便性を重視

して設計され、既存の場が壊れることを拒まず場を貫通し一直線に進むイメージである。平面・断面ともに直線的な動きをとる。

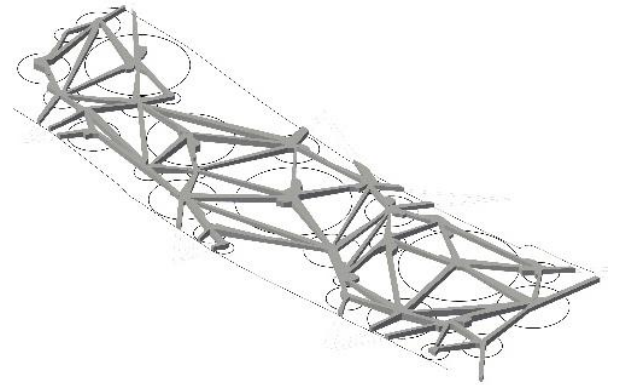


図11. 都市の道のアイソメトリック図



図12. 都市の道の西側部分立面

② 生態系の道

生態系の道は蛇籠で設計する。蛇籠の道は生態系のための道であり、効率的なルートではなく場と場の間を縫うようなルートとなる。植物が成長するときや水が流れるときのように既存の場を貫通するのではなく、空いている場所を縫うように進むイメージである。また、都市の道とは対照的な役割も果たす。道としての役割も果たすが、蛇籠は水や土、植物が入り込む余地がある為に、そこに生態系が芽生えるのである。ある種の寛容さを兼ね備えた道である。平面・断面ともに曲線的な動きをとる。

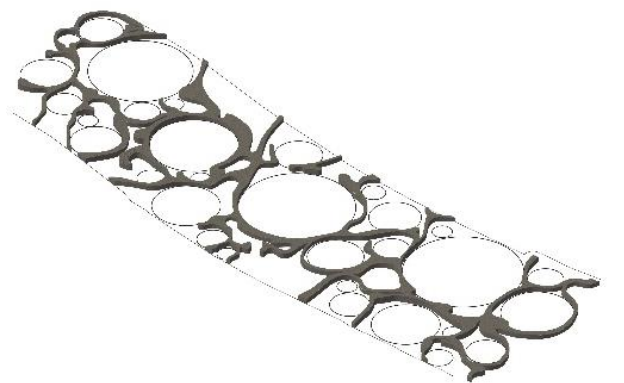


図13. 生態系の道のアイソメトリック図



図14. 生態系の道の西側部分立面

(3) 溜まり

①②で述べた2種の道により囲われてできた空間を「溜まり」とする。(1)で定義した場合は2種の境界線により大小さまざまな大きさに細分化され多様化され「溜まり」となる。

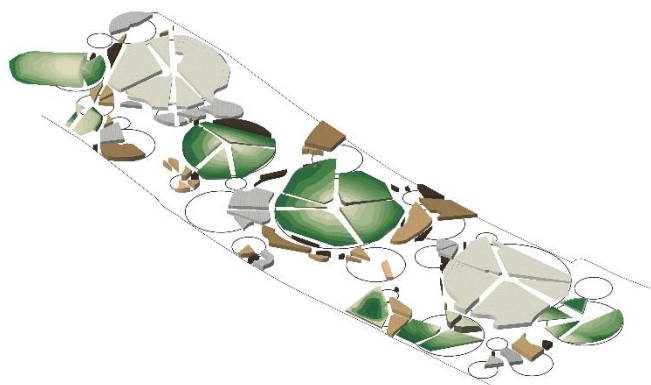


図.15 溜まりの配置

5.3 「溜まり」の響き合い

「溜まり」同士の響き合いは定まったものではなく、時間、気候、季節によって変化する動的なものである。本建築で起きる様々なアクティビティの響き合いの例を挙げる。

① 溜まりの価値が多様化する響き

普段子供たちが遊ぶ場として存在する公園は、西洋の森とビオトープに挟まれている。本来遊び場や通り道にしかない公園だが、ここでは時に西洋の森とビオトープを利用し自然について学習する屋外学習場ともなる。異質的な3つの要素が輻輳し響き合うことで公園の価値が多様化し、動的に生き続ける場となる。



図.16 公園と西洋の森とビオトープの響き

② 邂逅を生む響き

式場では、結婚式、成人式など様々なことが催される。式場の隣には、人が一人ちょうど座れるサイズの石だけが置かれた小さな溜まりが存在する。今、式場では結婚式が催されており、それを見た一人の女性が小さな溜まりの石に座り祝福するようにギターで弾き語りを始めた。すると結婚式に来ていた人のみならず様々な場から人々が響き合い集まってきた。自由度を持った溜まりの響き合いは、人々に新たな出会いをもたらし、響きの輪を広げていく。



図.17 式場と小さな溜まりの響き

③ 自然との対話を生む響き

コンサートホールでも、宝塚歌劇や吹奏楽の演奏会など様々なことが催される。ホールの隣には小さな堀を挟んで竹林が存在する。また、竹林には蛍が生息しており6月になると光り始める。すると蛍が光る竹林を背景として、ホールではピアノのコンサートが開かれた。人間とは対立関係にあり異なった時間軸を持つ自然界の生き物と響き合い、自然界との対話が生まれる。



図.18 コン서트ホールと竹林の響き

6. まとめ

都市の道、生態系の道、溜まり、これらを川という一つの場の中で拮抗させることにより、都市に存在するさまざまな要素たちが響き合う状態を作り出せたと考える。何か1つの要素が欠けたとしても本建築は全体として消えることはなく、変容する都市の中で少しずつ姿を変えながらも生き続けることとなる。

7. 参考文献

- 1) ロバート・ヴェンチャーリ (著)・伊藤公文 (訳), 建築の多様性に対立性, 鹿島出版会, 1997, 252P
- 2) [宝塚市] たからづかデジタルミュージアム
<https://adeac.jp/takarazuka-city/top/topg/03postcard/index.html>
(accessed2024. 02. 05)
- 3) 国土地理院: 地理院地図/GSI Maps
<https://maps.gsi.go.jp/>
(accessed2024. 02. 05)
- 4) 基盤地図情報サイト: 国土地理院
<https://www.gsi.go.jp/kiban/>
(accessed2024. 02. 05)